

氏 名	渡 瀬 勉 わた せ つとむ
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 221 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 40 年 9 月 28 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	Studies on the Relationship between Peptic Ulcer and the Parathyroid

(消化性潰瘍と副甲状腺との関係に関する研究)

論文調査委員 (主 査) 教授 本 庄 一 夫 教授 木 村 忠 司 教授 伊 藤 鉄 夫

論 文 内 容 の 要 旨

消化性潰瘍の発生は胃液の酸度と、この酸に対する胃・十二指腸粘膜の抵抗機転とのアンバランスにより発生すると考えられ、特に胃液酸度の上昇を発生因子とするものが多い。一方副甲状腺機能亢進症にみられる消化性潰瘍では酸度の上昇を認めないことが多く、最近注目されてきた副甲状腺機能亢進に合併する消化性潰瘍の形成機転は過酸によるというよりもむしろ、酸に対する胃及び十二指腸粘膜の抵抗性の減弱に意義があると考えられる。著者は消化性潰瘍における副甲状腺の関与につき臨床的並びに実験的に検索し、次の結果を得た。

- 1) 過去5年間に金沢大学第二外科において手術的に確認された消化性潰瘍 191 例の手術前の胃液分割採取による検査では、胃潰瘍137例中65例47%、十二指腸潰瘍54例中11例20% は胃液酸度の低下せるものがあり、その胃液酸度の低下は病期期間や随伴性胃炎の強弱にあまり関係がなかった。
- 2) これらの症例に臨床的に副甲状腺機能検査を行なった所、消化性潰瘍症例の中には副甲状腺の亢進、特に腎細尿管における磷再吸収率の低下を示したものが認められ、これらは胃液酸度が正常か、むしろ低下しているものに含まれていた。
- 3) 実験的副甲状腺機能亢進状態のラットは胃液酸度の上昇を示さなかった。
- 4) 実験的副甲状腺機能亢進状態のラット及び家兎においては、糜爛から急性潰瘍に至る種々の病像を認めた。ラットでは副甲状腺ホルモン全量700単位投与した群ではその発生率23匹中 4 匹17%、全量1000単位投与では15匹中 3 匹20%で、家兎では全量3000以上で 9 羽中22%の発生率であった。
- 5) かかる変化は十二指腸起始部に好発し、臨床的副甲状腺機能亢進症における消化性潰瘍が十二指腸に好発するのとよく一致した。
- 6) P A S 染色所見による粘膜の P A S 染色態度の減退の他 Brunner 氏腺の機能障害が推定されたが、この障害によって Brunner 氏腺から分泌されるといわれるアルカリ性粘液の分泌低下により十二指腸内の酸度が増加し、粘膜の抵抗性の低下と共にかかる急性潰瘍を形成する一因をなしたものと思われる。

論文審査の結果の要旨

消化性潰瘍の発生には種々の因子があげられているが、胃液の酸度とこの酸に対する胃、十二指腸粘膜の抵抗機転とのアンバランスを、とくに胃液酸度の上昇を発生因子とする説が有力である。一方、副甲状腺機能亢進にみられる消化性潰瘍では胃液酸度の上昇を認められない事実が指摘されている。

そこで著者は消化性潰瘍における副甲状腺の関与につき臨床的ならびに実験的に検索し、つぎの結果を得た。すなわち、

1) 過去5年間に金沢大学第2外科で手術的に確認された胃潰瘍137例中65例47%、十二指腸潰瘍54例中11例20%は胃液酸度の低下せるものがあり、酸度の低下は病悩期間、随伴性胃炎の強弱と関係がなかった。

2) 副甲状腺機能検査では副甲状腺機能亢進、とくに腎細尿管における磷再吸収率の低下した症例に胃液酸度が正常ないし低下しているものが認められた。

3) 実験的副甲状腺機能亢進状態のラットでは胃液酸度の上昇を認めず、しかも糜爛から急性潰瘍にいたる種々の病像をていした。

かかる変化は十二指腸起始部に好発し、PAS染色態度が悪く、Brunner氏腺の機能障害、ひいてはアリカリ性粘液の分泌低下が推定される。

本論文は学術上有益にして医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。